

月刊 フューネラルビジネス

FUNERAL BUSINESS

10

2019
no.275

1998年3月13日第三種郵便物認可
2019年9月25日発行(毎月25日発行)
第24巻第10号(通巻275号)

特集

事業者視点でみる

「遺体安置」ニーズ

www.funeral-biz.com

運送業から参入 地区最大の20体収容施設を完備

遺体安置ホテル／八王子急便(株)霊柩事業部 メモリーサポート [東京都八王子市]

労働環境の悪化を見直す 霊柩分野などの新分野への挑戦

東京都八王子市に本社をおく八王子急便(株) (社長熊谷庄一氏)は、多摩地区最大級の20体収容可能な遺体安置施設を擁する。京王線北野駅から車で約8分のロードサイドに立地する本社内の倉庫を改装し、遺体安置のスペースを設けたものだ。

八王子急便は1983年に設立した引っ越しや商業貨物を取扱う運送会社である。運送業界自体が人手不足のなか、働き方改革に加えて会社の収益事業を見直そうと試行錯誤していくなかで、遺体搬送・安置というキーワードにたどり着いた。

運送業界で人手不足が大きく影響するのは、社会人や学生の新生活がはじまる3月、4月の繁忙期。近年では一時期に殺到する引っ越し依頼をさばくことがむずかしく、値上げに踏み切ったり、受注できない状況に陥る場合も多いことから、本業の運送業だけに頼らない多角的な事業参入を模索していた。

「配達作業の基本である、多くの荷物をトラックに詰め込み、配達先に運び入れるのはとてもたいへんな肉体労働で、体力を使います。今後も採用難が続くと、事業継続が危うくなってしまいます。社員採用時に自社の強みなどを考えたときに、いままでと同じような働き方しか

掲示できなければ、長い目で見たキャリア形成や採用の幅の妨げとなり、これでは将来的な会社の発展は望めません」と、霊柩事業部 メモリーサポート 遺体安置ホテルマネージャーも兼任する熊谷庄一氏は語った。

そこでたどり着いたのが、寝台車による遺体搬送事業(霊柩事業)への参入だ。2013年9月に霊柩事業部を新設。そこから派生し、17年8月に「遺体安置ホテル」という名称の遺体安置施設を開設した。

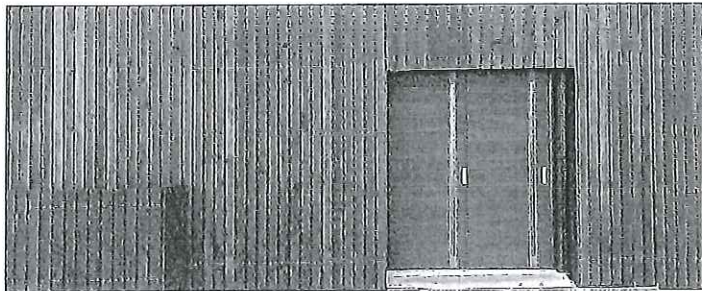
遺体の搬送は、いままで自社で培ってきた丁寧な運転スキルと接客スキルを活かしつつ行なえることから、コンセプトを「ゆりかごから墓場まで」とした。

霊柩事業部の開設当初は、寝台車1台からはじめたが、社内でも抵抗があったという。

「最初の頃は、『霊柩車をどうかしてください』と社員に言われるのです。自分で乗って敷地内の場所に移動させればよいことなのに、乗るのに抵抗感があって頼みに来るのです。最初はそんな調子でしたが、徐々に認められ、そのうち言われなくなりました」(熊谷マネージャー)

病院・自宅・警察などで遺体を預かり、会館や火葬場へ搬送。いまでは4台の寝台車を有し、霊柩事業部は4人が所属する部署となった。遺族からの直接依頼は1割程度で、葬儀社や警察等からの搬送依頼が9割。月によっては130件近い依頼があり、自社の安置施設を除いた搬送先は、葬祭会館が半数を超え、次に自宅が2割、火葬場が2割、長距離搬送の依頼も月に数件発生する。

自社で葬儀は施行していないため、「周辺の葬祭事業者が人手不足解消のため、搬送・安置業務を社外へアウトソースする、働き方改革の一環として利用いただくことも多い」と熊谷マネージャー。



木目調の外装にし、味気なさを払拭した遺体安置ホテル

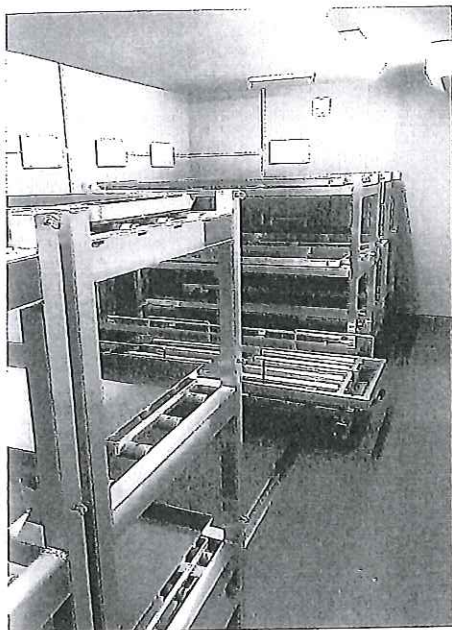
■遺体安置ホテル概要

[所在地]東京都八王子市下柚木1941-9

[管理会社]メモリーサポート

[開業]2018年8月

[収容体数]20体



大型保冷庫内には18体収容できる



木目調の保冷庫(左側)と多目的スペース

安心と信頼を積み重ねて 最大月50件の安置実績

遺体安置施設は本社倉庫内の一角に設けており、出入口は事務所と別になっている。安置室の出入口周辺は木目調の壁面とし、殺風景な倉庫色を払拭したうえで故人を安らかに偲べる空間へと変貌させた。

中に入ると、木目調が施された大型保冷庫(21㎡)と、2基の1体用保冷庫、そして多目的に使われる空間(18㎡)が広がっている。

大型保冷庫内部は3段の棚式の可動式ラックが6台収容されている(計18体収容)。このため、保冷施設をすべて使用したとして20体。多目的な空間は、打合せや面会、納棺などができる空間として利用する。

安置価格は1泊1万2,000円(税込、10月以降)。面会は、8時から19時の間の事前予約制で、面会時間は30分以内のみで料金は取っていない。

搬送は、24時間受け付けており、10kmまでを1万5,000円(税別)としている(深夜料金別)。

「当施設の特徴は2つあります。多摩地区最大級の収容体数であることと、ここではドライアイスは一切使わない安置手法を採っていることです」(熊谷マネージャー)

ドライアイスでの冷却は遺体安置の定番であ

るが、CO₂の発生などの環境問題につながるからだ。代わりにこの施設では保冷庫内をマイナス4度に設定しつつも、ご遺体が冷凍されない特殊な保冷庫を使用する、いわゆるパーシャル状態で保存・保管する技術も採用した。

「葬祭事業者も、『お客様から預かった大切なご遺体を他社に預けてもしものことがあったら大変』と不安がる事業者もいましたが、いまでは安心して預けていただいています。これからも信頼を積み重ねていきたい。特に、夏場は依頼が多く、常に5体くらいは安置状態で、平均月30体が入り出すほどのです。納棺していれば、状態がひどいご遺体でも受け付けますので、自社施設では手に負えずに預けてくるご遺体もあります。そのため、施設内は除菌・脱臭装置も万全です。もちろん、ご遺体のとり違いがないように、バーコードと名前をしっかりと記すことで、万が一の間違いがないように管理しています」(熊谷マネージャー)

また、多目的スペースで面会や納棺を行なうときは、遺族心情に気をつけている。保冷庫では、納棺前の遺体も安置しているため、遺族が面会をしたり、多目的スペースで納棺などを希望する場合には他家の遺体と遭遇しないよう、予約した時間に合わせて1体用の保冷庫へと移し替えてから案内している。

多摩地区で霊柩事業を行なう事業者で、最大規模の遺体を収容できる安置施設であることを強みに、霊柩運送との両輪で他部署のサポートを受けながら、さらなる利用促進を目指していく。